

# 過疎地におけるスポーツ活動がコミュニティに与える影響

スポーツビジネス領域

5018A011-2 江端 郁弥

研究指導教員：間野 義之 教授

## 1. 背景

近年、過疎地と呼ばれる市町村やその対象となる面積が急激に増加してきた。総務省自治行政対策室（2018）によると、過疎地域自立促進特別措置法の本則が適用される市町村数は、平成18年から平成28年の間に100も増えている。

また、過疎地では多くの問題が発生している。具体的にそれらの問題は、ハード面の問題とソフト面の問題の2種類に分類される。

はじめに、ハード面の問題は、主に社会インフラの維持管理について議論されている。具体的に、小林ら（1999）、乗本（1996）は、過疎により交通需要が減少しており、維持する難しさを主張している。

次にソフト面の問題は、主に人とのつながりやコミュニティ、生きがいについて問題視されている。山本（1996）は、生きがいの喪失等から過疎地の高齢者の自殺率が高いことを指摘している。また、国土交通省（2006）や山内（2009）は、人と人とのつながりの集合である、コミュニティの衰退を指摘されている。

これらの問題に対して、片田ら（1999）は、地域の住みやすさ感に影響を与える要因として、コミュニティと社会インフラを比較している。その結果、コミュニティに対する評価の方が高いことが明らかとなり、それを改善することが地域において優先されるべき課題と捉えることができる。

上記の問題の解決策として、1973年の「経済社会基本計画」以降、スポーツが有力な手段として認識されている。しかし、これまでの研究蓄積を見ると、コミュニティの形成を示唆しているものはあるものの、根本的にスポーツとコミュニティの関係性を議論したものは少ない。したがって、本研究では、過疎地においてのスポーツ活動がコミュニティに与える影響を明らかにする。

## 2. 先行研究の検討

これまでスポーツ活動を行うことによるコミュニティへの影響を明らかにした研究はいくつかある。これら

を大きく分類すると2パターンに分かれている。「スポーツをすることを通じてコミュニティが形成される」という視点と「コミュニティ内でスポーツをすることによってソーシャルキャピタルが高まる」という視点がある。

コミュニティの形成に関して、海老原（1980）は、スポーツ活動がコミュニティの形成の一躍を担うことが可能であると指摘している。また、Zhou,et.al.(2018)においては、参加型スポーツイベントに参加することでソーシャルキャピタルの醸成を媒介してコミュニティが形成すると主張している。しかし、参加型スポーツイベントへの参加者のみを対象としているため、最初のプロセスが「スポーツイベントへの参加」と限られている。

ソーシャルキャピタルの醸成に関しては、主に総合型地域スポーツクラブ内で検討されている研究がいくつか散見される。実際に仲谷（2013）は、スポーツ活動を通じて、ソーシャルキャピタルを構成する3項目のうち、「信頼」、「つきあい」、が高まることを示唆している。

さらに、過疎地において総合型地域スポーツクラブは、集落外に橋渡しをしていることを明らかにしている。しかし、過疎地に多く見る、住民たちが主体的に活動するコミュニティを対象とした研究はなく明らかにする必要がある。

## 3. 研究目的

本研究では、過疎地におけるスポーツ活動がコミュニティに与える影響を明らかにする。本研究の目的を達成するために、RQ1: 過疎地においてスポーツ活動を行うコミュニティはどのように形成されるのか、RQ2: 過疎地でスポーツ活動を行うコミュニティにおいて、ソーシャルキャピタルは蓄積されるのか、の2つを設定した。

## 4 研究方法

本研究の調査対象地は、北海道初山別村を対象とした。調査の概要として、対象地においてスポーツ活動を行う住民に現在所属するコミュニティに関する情報とコミュニティにおけるソーシャルキャピタルの醸成について

インタビュー調査を行なった。

RQ1 の分析方法は、クランプトンら (1991)の「プログラム・ライフサイクル」を参考に分析した。具体的な手順として、インタビューで明らかになった事象をそれぞれのフェーズにカテゴリー分けを行った。

RQ2 の分析方法は、佐藤 (2008) のコード・マトリックスを参考に分類を行った。縦軸には、事例を記入し、横軸には共通の概念や事象を記入するものである。本研究において縦軸には、対象者を記入し、横軸には、これまでのソーシャルキャピタル研究で明らかにされている 3 つの概念「互酬性の規範」「ネットワーク」「信頼」を記入した。

## 5. 結果

調査の結果、コミュニティの形成プロセスと各プロセスで起きる事象が明らかになった。プロセスは「導入期」、「成長期」、「全盛期」、「衰退期」の 4 つであり、事象は「有志（数人）」、「勧誘」、「勧誘（活動の充実）」、「勧誘（人数不足）」、「参加者の充実」、「活動の充実」、「参加者の減少」（高齢化）、「参加者の減少（仕事）」「参加者の減少（ケガ）」、「勧誘」の 10 であった。

カテゴリー	コード数
導入期	
有志（数人）	9
成長期	
勧誘	6
勧誘（活動の充実）	2
勧誘（人数不足）	2
成熟期	
参加者の充実	4
活動の充実	2
衰退期	
参加者の減少（高齢化）	2
参加者の減少（仕事）	3
参加者の減少（ケガ）	1
勧誘	5

図 1：コミュニティ形成プロセスと各プロセスの事象

ソーシャルキャピタルについては、「互酬性の規範」、「ネットワーク」、「信頼」の全てが確認された。また、醸成したソーシャルキャピタルの特徴として、外部性を持つことも明らかになった。

## 6. 考察

第一にコミュニティの形成について、海老原 (1980) のスポーツ活動を通じてコミュニティが形成するとい

う示唆を支持する結果となった。

しかし、コミュニティの形成プロセスについては、先行研究とは異なる知見を得た。Zhou,et,al. (2018) は、参加型スポーツイベントに参加することをきっかけに様々なアウトカムが発生し、最終的な結果としてコミュニティが形成すると指摘している。先行研究と異なる結果となった原因について 2 点考えられる。1 点目は、過疎地において、Zhou,et,al. (2018) で対象としていたような一般の人が多く参加する参加型のスポーツイベントがほとんど開催されていないことが考えられる。2 点目は、対象とする種目の違いが考えられる。Zhou (2018) では、「ランニング」を対象としていたが、本研究では、「ミニバレー」、「卓球」、「ショートテニス」、「バトミントン」等である。これらは相手や多くのメンバーを必要とすることから形成プロセスが異なったと考えられる。

第二にソーシャルキャピタルの醸成については、仲谷 (2013) や Tonts(2005) の結果を一部支持する結果となった。また、本研究で明らかになったソーシャルキャピタルは、広域的につながりが拡大していたことから、仲谷 (2013) で主張していた、橋渡し型のソーシャルキャピタルの醸成が本研究でも確認された。しかし、農林水産省 (2007) が主張していたような内部思考が強いソーシャルキャピタルや Tonts(2005) が主張している組織内の閉鎖性は確認されなかった。この理由として、メンバーの勧誘や運営まで全て、住民が中心となって行っていた。その結果、活動の存続を求めるためには、より開かれたコミュニティであり、外から人を集めなければならないという理由が考えられる。

## 7. 終わりに

本研究の目的は、過疎地におけるスポーツ活動がコミュニティに与える影響を明らかにすることである。その結果、RQ1 では、過疎地におけるコミュニティの形成プロセスは、「導入期」、「成長期」、「全盛期」、「衰退期」の 4 つのプロセスであることが明らかになった。RQ2 では、ソーシャルキャピタルの 3 つの概念である「互酬性の規範」、「ネットワーク」、「信頼」の全てについて全員がエピソードを語っていた。したがって、スポーツ活動とコミュニティの関係性は、コミュニティを形成するだけでなく、外部性を持ったソーシャルキャピタルを醸成することが明らかになった。